

はじめに

人類の意識的知性はどれほどのものか

コペルニクスやガリレオやダーウィンの例をあげるまでもなかるうが、新しい知識が従来の科学知識にとって代わるまでには、特に西洋では体制派の科学者や政治的、宗教的な権威の激しい反対に遭うという歴史が、これまで何度となくくり返されて来た（たとえば、Barber, 1961 参照）。そうしたいわば守旧派の抵抗がほぼ終息した時をもって、その知見や理論が、晴れてその時代の科学知識として受け容れられることになるのである。あたかも、自ら加入を望んでいる社会集団に迎え入れられるためには、それなりの通過儀礼が要求されるかのようである。

新しい学説に対して引き起こされる抵抗は、知的なものにしても感情的なものにしても、特に政治的、宗教的権威と衝突する場合には、確かにかなり頑強なこともあるわけであるが、その場合でも、その知識が真理に迫るものであれば、激しい反対は最初のうちだけで、結局は体制派が次第に矛を取める形で決着が着くという経過を辿る。それは、これまでの歴史がくり返し教えている通りである。^[註1]では、新しい知見や理論の場合、どのようなものであっても、それと同じ道筋を辿ると考えてよいのであろうか。つまり、いか

[註1] ただし、例外がないわけではない。いわば神の国であるアメリカ合衆国では、進化論を認めようとする人たちが、今なおかなりの数にのぼるからである。この問題については第1章でとりあげる。

[註2] それに対して、アインシュタインの相対性理論は、革命的とされるには、なぜかさしたる反対もなく短時日のうちに受け入れられたのみならず、既に百年以上が経過した古い理論であるにもかかわらず、今なお斬新な理論であるかのように奉られている。経験に基づく理論ではないためなのかもしれないが、ここには、何か釈然としないものが残る。他の理論とは、完全に一線を画しているからである。

なる現象をめぐる所見であっても、その実在を裏づける証拠が得られたあかつきには、その証拠をきちんと提示したうえで時が満ち来るのを待ちさえすれば、従来の学説と同じように、やがて主流科学者に受け入れられ、新しい科学知識として迎え入れられるものかどうか、ということである。

受け入れる側に立つと、これは次のような疑問になる。宇宙の森羅万象の解は、すべてが人間の知的理解の枠内に収まるものと、誰もが暗黙の裡に思い込んでいるが、これまでの科学知識と同じように、すべての真理を意識的な知的能力のみで把握することができるものなのであろうか。その例外に当たる事象が実在するとして、そのことについて正確な言葉で説明の尽くされた教科書を真剣に勉強すれば、理解力に問題がない限り、一般の科学知識と同じように、それを十分に身につけることが可能なかどうかということである。このような疑問が、少なくとも具体的な問題として問われたことは、これまで全くと言ってよいほどなかったのではなかろうか。それ以前に、そうした疑問を抱くこと自体がないはずである。この疑問は、経験を通じて初めて浮かび上がったものであって、理屈で考え出されたものではない。

これまでの常識からすると非常に奇妙なことに違いないが、人間は、さまざまな真理を、とりわけ心の本質に関する真理を自らの意識に対して包み隠そうとする性向をきわめて強くもっているようである。そのひとつの結果なのかもしれないが、人間の心を探究しているはずの心理学は、心を直接に扱うことなどできるはずがないという思い込みを明に暗に作りあげ、心自体を扱う方法を模索することなど最初から考えていないようであるし、心と体の関係を扱っているはずの心身医学にしても、当事者が意識の上で感じた心理的負担と肉体的疾患との関係を、離れたところから断定的に臆測しているだけで、心身症のストレス学説を裏づける科学的証拠など厳密な意味では存在しないにもかかわらず、それ以上のことはやはりしようとしていないのである。

そうした例外に当たる理論としては、生物学の領域では**生氣論**と呼ばれる着想を筆頭として、今西錦司が唱えた**種社会**という概念や、それを拡張した**生物社会学**という領域や独自の進化理論などがある。私が専門とする心理療法の分野で言えば、小坂英世が提唱した精神分裂病の**小坂理論**があるし、私自身が唱えている**幸福否定理論**もそれに当たる。さらに根本的なものとして

は、人間の心と脳とが別個の実在であるとする心身二元論があげられる。超常現象やその研究は、その最たるものと言える。これらはいずれも、主流科学者からすれば、愚にもつかない“非科学的”言説であって、まともにとりあう必要のない妄言のようなものにすぎないのである。

幸福に対する抵抗という人類の心理的特性

幸福否定理論について言えば、これを知的に理解するのは、とりわけ感情的なレベルで受け容れるのは非常に難しいことが、既に三十数年前から日常的にくり返し確認されている。言うまでもなくそれは、従来の定説や一般常識に反する考えかたであるためではない。それだけであれば、たとえ反発を感じたとしても、丹念に勉強しさえすれば遅かれ早かれ理解できるようになるはずだからである。^[註3]

この理論がいかに体得しにくいかをわかりやすく説明してくれる事例をあげると、50代のある女性は、私のいう抵抗の意味が実感としてわかるまでに、つまり感情的に把握できるようになるまでに15年もの年月を要したと

[註3] 幸福否定理論に妥当性があることを教えてくれる、ほとんどの人たちが経験的に承知している事例をあげるとすれば、時代や場所を問わず、人間全般が、いわゆる怠惰な性癖を根強くもっていることであろう。その現われのひとつが、締め切りまぎわにならないと、どうしても重い腰があげられないという“悪癖”である。外部からの要請があつてすらそのような状況であるとすれば、締め切りがない場合には絶望的な状態になってしまう。人間は、自発性が要求される場面では、その発揮を可能な限り拒もうとするからである。

[註4] 批判をする場合、対象となる知見や理論が正確に把握できていなければ、必然的に的が外れた批判になってしまうし、論争の場合には議論がかみ合わないことにもなる。逆に言えば、そのような対応を受ける分野が、ここで問題にしている対象ということになる。懐疑論者を自称する人々は、そうした知見や理論を批判しているつもりなのであろうが、現実にはその対象を正確に把握することがそもそもできていないため、科学的な批判になっていないし、それ以前に、その体をなしてすらいない。今西錦司が唱えた進化論や生物社会学に対する外的批判については、前著『今西進化論と小田柿生物社会学』（2020年、アマゾン・オンデマンド出版）第4章で、超常現象研究については、拙編書『サイの戦場——超心理学論争全史』（1987年、平凡社）で詳細に扱っている。

いう。その時点までに、1時間半の心理療法を毎週1回ずつ——延べにして千百時間以上も——受けており、その抵抗に日常的に直面していたにもかかわらずである。もちろんこの女性に知的な意味で問題があったわけではない。この女性は、『ものぐさ精神分析』などの著書で知られる心理学者、岸田秀を恩師とし、専門的な仕事に従事していたのである。付言しておけば、私の言う抵抗は**幸福に対する抵抗**という意味なので、一般常識や精神分析で言う抵抗とは正反対の概念ではあるが、この女性の場合、抵抗という概念の感情的受け容れが難しかったのはそのためではない。それまでも、実感として把握できていなかっただけで、理屈としてはわかっていたのである。^[註5]

しかしながら、この女性が特殊な事例であるわけではない。これは、先に述べておいたように、わかりやすい事例として掲げただけであって、単なる一例にすぎない。私の心理療法理論は、それほどまでに知的な理解を、さらには感情的な理解を阻むのである。ここには、これまで見落とされてきた何か重要な要素がある。

従来のな主観的印象を通じてではなく、瞬時に起こる心身の**反応**という信頼性の高い客観的指標（眠気、あくび、種々の身体的変化）を利用して、三十数年という決して短いとは言えない時間をかけて厳密に検証し続けてきたところによれば、幸福否定^[註6]というとてつもなく強力な意志を生後に身につけたと考えるのはこのうえなく難しいことが、ますます明確になっている。この無意識的な意志は、生まれ育った時代や文化圏や生後の経験とは全く無関係に、人種を問わず人間なら誰であれ生得的にもっている、本能と見まごうほどの普遍的性向のようなのである。もしそうであれば、これは人類全体が生

[註5] もうひとつ付言しておく、1973年以来、主として精神分裂病や心身症の心理療法を行ってきた私は、1980年代半ばに幸福否定という現象が人類に普遍的なものらしいことに気づくようになり、それからの35年ほどは、主としてその裏づけをとることに専念してきたわけであるが、明確な例外が見つからないまま現在に至っている。しかしながら、抵抗というものの強さには今なお驚かされるがあるので、これほどの長期にわたって日常的にその経験を重ねてきたにもかかわらず、抵抗の強さがまだ十分には把握できていないことになる。

[註6] 幸福否定という概念については、これまで何点かの著書（笠原、1997年、2004年a、2010年、2017年）を出している、関心のある方は参照されたい。

得的に備えている種特異的な特性ということになるので、その生物学的起源を探る必要があるし、その原初的、萌芽的な要素が生物の進化に及ぼす影響を考えるうえでも、このうえなく重要な問題になるはずなのである。

自ら望んでいるはずの幸福を頑強に否定しようとする無意識的意志たる**内心**は、能力的にも性質的にも、西洋で悪魔サタンと呼び習わされてきた全知全能的存在に最も近いが、現実^[註7]に生身の人間の内部にあるものとしては、宗教的背景で語られるものを除けば、これまで全くと言ってよいほど知られていなかった。

内心は、自らの意識的意志や肉体が前向きな行動をとろうとすると、それをなぜか完璧に察知して、心因性の症状などの、動物ではおそらく起こりえない人間独自の問題を目の前に、つまり自分の意識が無視できないような形で作り出す。それに対して、いわば蚊帳の外に置かれて夢遊病者的状態にある意識は、何が起こったのかかわからないまま苦しみ、右往左往しながらもそれを克服しようと努めるか、さもなければ、その苦しみに耐えきれず、その場から逃げ出してしまう。いずれかの選択を迫られるわけであるが、現実には、後者の道を選ぶ者のほうが圧倒的に多い、というよりも前者を選択する者はほとんどいないのではなかろうか。イエス・キリストは、この問題をわかりやすく、命に至る「狭い門」に対して、「滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い」という言葉で表現したのであろう。

その困難に立ち向かい、それを乗り越えるべく**前向きな努力**を選択した場合、内心が生み出す、自らの幸福に対する抵抗にくり返し直面するという、自らの意識にとっては非常に苦痛な循環が発生する。まさしく茨の生い茂る

[註7] 禅にも、悪魔の甘美な誘惑という意味での魔境という言葉がある。どの文化圏にも似通った概念が存在するのであろう。

[註8] これは必要に迫られてということであるが、そうではなく、目の前に障害のない状況にしながら、こうした努力を積極的に選択するのが、修行と呼ばれる人類独自の方法である。この重要な人間的行動については、主に第6章で検討する。ちなみに、長年にわたって野球で活躍してきたイチローは、引退に際して、自分が本当にしたいことが見つかる**と必ず壁が出てくる**ので、それを乗り越える努力をすればよいという、そうした選択を続けてきた人物ならではのメッセージを残している。

細い道なのであるが、このように、自分自身の内心が、自らの意識を幸福感から遠ざけるという明確な目的をもって作りあげたものが、人間特有の悩みや苦しみの大部分と考えるとほぼまちがいない。意識が与り知らないところではあるが、自らが作りあげた苦しみの^{わきま}で、いわば架空の苦悩にすぎないわけであるが、自らの弱点を完全に弁^わか^ませているだけに、意識の上では非常に苦痛に感じられるようにできているのである。そして、その苦難から逃げ出すことなく、苦しみながらその抵抗をわずかずつ乗り越えてゆくと、それにつれて、きわめてゆっくりとはあるが、心の奥底に潜んでいた**素直な思い**の一端が意識の上に浮上し、その分だけ自らの**意識**が目覚めてゆく^[註9]というのが、現在の私が抱いている心理的意識観である。この着想は、長年の経験を通じて、少なくとも私の中ではますます確固たるものになってきているのであるが、これが実際に正しいとすれば、本心やその否定形である内心はもとより、人間の心理的意識の位置づけが大きな問題になってくる。それらを検討するためには、何よりも事実を正確に把握することから始めなければならない。

心理的意識の出自の謎

くり返すようであるが、人間の内心は、必ず、本人にとっての成功や進歩およびその指標である幸福感を否定する方向へ働くという特徴をもっている。したがって、その舞台裏を見れば、自分にとって進歩となるものを、さ

[註9] 昭和初期の詩人、中原中也は、「さうすればそのうち喘ぎも平靜に復し／たしかにあすこまでゆけるに違ひない」（「言葉なき歌」）と謳っているが、それは、この経過について語っているもののように思う。

[註10] 心理的意識という耳慣れない言葉を使っているのは、生理学的意識との混同を避けるためである。この問題は第6章で扱うことにしたい。

[註11] 今西錦司は、これと相同の現象として、進化の仕組みについて、自らが批判していたテイヤール・ド・シャルダンの理論にも似た発言をしている。「進化というものは、そういうことをあんまり言う和前成説みたいになってしまうけど〔中略〕それがずっと展開してゆくわけですよ。はじめに決められたやつがずっとね。evolveって言う言葉の中に、そもそもそういう考えが入ってると違うかいな。それは花を咲かせるみたいなものやからね」（今西、飯島、1978年、109ページ。傍点=引用者）。

らには、その進歩につながる事象や状況を正確にとらえ、それが心理的意識に浮上するのを頑強に阻んでいることになる。その結果、心理的意識の側から見ると、その記憶が必ず消えるという形をとる。なぜか人間は、自らの意識が許容する範囲を超えた進歩や幸福感のみならず、自らが潜在的に保持する能力や人格を、おそらく緊急時という限定的な状況を除いて、自らの心理的意識に浮上させないようにするという明確な目的のもとに、密かにもてるその能力を総動員しているようなのである。その際に、心理的意識が目の前の幸福感に気づかないようにするための、いわば目くらましの手段として作りあげられるのが、いわゆる心因性の心身症状なのである。そうすると、自らの本質を自らの意識に隠すために、隠された能力をふんだんに使って万全の監視態勢を敷き、しかもその能力を心理的意識にわからないようにしながら発揮するという、綱渡り的な作業を日常的にくり返していることになる。それが何ごともなく行なわれ続けているのは、心理的意識が、このように完全に“蚊帳の外”に置かれているためにほかならない。

こうした現象が現実には、しかも日常的に起こっているとすれば、それは自分自身の、ひいては帰属社会集団の進歩を、さらには種自体の進化を阻害するものでしかなく見える。しかしながら、この現象を別の視点から見れば、二岐に分かれた道の進むべき方向に、大きな障害物というひととき目立つ道しるべをいつも置いてくれていることになる。このようにして、進むべき方向をそのつど明瞭かつ確実に教えてくれるのである。^[註12]

自分の素直な気持ち（私の言う**本心**の一端）に従って、つまり自分が本当に望んでいるように生きたいのであれば、狭い門という、自らの内心がまちがいなく作り出すそうした難関を乗り越えながら進んで行けば、道を誤ることは絶対にと行ってよいほどないということであり、自らの心理的意識からす

[註12] アンリ・ベルクソンは、「一般的に言うところ、生命全体の進化においても、人間社会の進化においても、個人の運命の変遷においても、最もリスクを犯したものがこそ最も大きな成功を収めた」（ベルクソン、2010年、170-171ページ。傍点=引用者）と明言しているが、それはこの点について述べたものなのであろう。この問題については、前著『今西進化論と小田柿生物社会学』第9章「ベルクソンの立場から」という節で詳細に検討している。